目　　次

◆社会正義と社会保障(第31回国際社会福祉会議報告)……2

＊会議開催あいさつ……3

ICSW世界会長　ソルヴェイ・アスケム

＊国際社会福祉協議会　世界・地域代議員会に出席して……4

淑徳大学　社会学部　教授　多々良　紀夫

＊日程……15

第 31 回 ICSW 国際社会福祉会議報告
（マレーシア）

(The 31st ICSW International Conference on Social Welfare)

会期：2004 年 8 月 16 日（月）～ 20 日(金)
会場：マレーシア クアラルンプール
プトラ・ワールド・トレード・センター
テーマ：社会発展と社会正義
（Social Progress and Social Justice）
主催：マレーシア社会福祉社会開発協議会

同会議は、2004 年 8 月 16 日から 20 日までの 5 日間、マレーシア クアラルンプール市のプトラ・ワールド・トレード・センターにおいて開催された。

国際社会福祉協議会（International Council on Social Welfare, ICSW）では、各国間、各国際団体間の情報、経験を共有し、福祉の増進にむけて協力を進めることを目的に、1928 年より国際会議を開催している。国際会議は 2 年ごとに世界会議、その合間の年に地域会議があり、2004 年は世界会議の年であった。

60 カ国から NGO 関係者、学識者、政府関係者ら 1,100 名を超える人々が参加し、日本からは 3 名が参加した。

会議では「社会発展と社会正義（本会訳）」（原題：Social Progress and Social Justice）をテーマに、シンポジウム、ワークショップ、討論会などが行われ、各専門分野における活発な議論が交わされた。

なお、同会議に併せて、国際社会福祉協議会の加盟団体による代議員会がマレーシア、パン・パシフィックホテルにおいて開催され、活動報告や財務報告などが行われ、国際社会福祉協議会の今後の運営に関する協議がなされた。

会議開催あいさつ

ICSW 世界会長
ソルヴェイ・アスケム

今回、76 年間の歴史の中で、初めてマレーシアが ICSW の国際会議を開催することになりました。

ICSW の会議を開催することは、マレーシア社会福祉社会開発協議会にとって夢であったことと存じます。会議によって開催国の社会開発プロセスが支援されることはご存知のとおりです。しかし本会議を通して、開催国の関心は、我々が国際的使命を果たすにあたって直面している諸問題に向けられています。ですから、利益を受けるのは参加者だけではありません。メディアを通して、民間人も政策決定者も、新しい知識を得ることができるのです。

「社会発展と社会正義」というテーマは、その言葉以上にも以下にも読み取ることが出来ます。「社会発展と社会正義」は、我々にとって第一の絶対的なテーマである「グローバル化」に含まれる構成要素であるべきものです。グローバル化については多くが語られていますが、本会議では皆様が気付いていない要素について、いくつかご紹介します。

来年は、「社会開発に関する世界首脳会議」、「女性に関する第 4 世界会議」の 10 周年記念にあたる年です。また、国連ミレニアム宣言の 5 周年にあたる年でもあります。市民社会はこれらの会議から生じる目標を達成するために努力を重ねています。本会議では、国連加盟国が設定した目標への進歩その他について、多方面にわたって検討する予定です。

皆様が、本会議でより多くの知識を得て、社会発展と社会正義のために一層ご尽力下さいますことを願っております。

皆様を代表して、お国に迎えて入れてくださいましたマレーシア政府と会議開催者であるマレーシア社会福祉社会開発協議会に対し、心から感謝申しあげます。

国際社会福祉協議会（ICSW）

世界・地域代議員会に出席して

―クアラルンプール（マレーシア）からの報告―

淑徳大学 社会学部　教授
多々良　紀夫

1.はじめに

国際社会福祉協議会（ICSW: International Council on Social Welfare）は、1928年にフランスのパリで国際社会事業会議（International Conference of Social Work）として設立された、世界でもっとも歴史のある国際的な非政府・非営利目的組織の一つである。ICSW は、「国連の人権宣言における経済的、社会的、文化的権利に関する規定、およびその他の国連の協定と条約にのっとり社会開発を推進する団体」として世界レベルで活動を展開している。2004年8月12日現在、ICSWの会員は32カ国の国内委員会(National Committees またはカテゴリーA会員)、9の国際団体（International Organizations またはカテゴリーB 会員)、それに42の社会福祉および社会開発を目的とする団体（Organizations which seek to enhance social welfare and social development またはカテゴリーC 会員）から構成されている。ICSWの全盛期であった1960、70年代に比べると、国内委員会の会員数が著しく減っている。消滅した ICSWの国内委員会の中には、イギリス、カナダやイタリアの国内委員会が含まれている。かつて、全米社会福祉協議会（National Council on Social Welfare―NCSW）と共に、ニューヨークに大きな事務局を持っていたICSWアメリカ国委員会は、昔の面影は全くなくなって、カテゴリーA会員の資格を数年前に失って以来、消滅は免れたが、カテゴリーC 会員の会費にもこと欠く存在になってしまった。一方、日本は、ICSW の創立当時から、主要な会員国として、この国際社会福祉組織の発展に大きな貢献をしてきた。今日、日本は、ドイツやフランスと共に、財政的にICSWのグローバルな活動を支える最も強力なカテゴリーA 会員である。さらに、日本は、ICSW 北東アジア地域の活動の活性化においても重要な役割を果たしている。

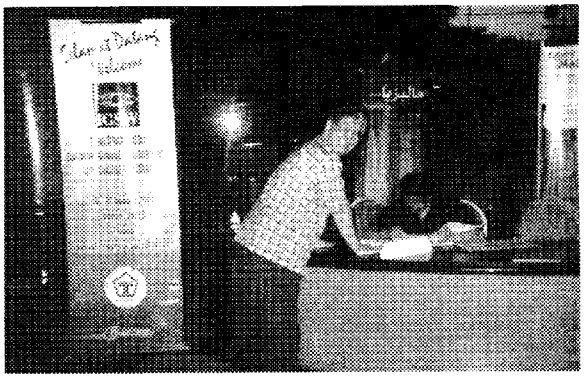
さて、ICSWは、2004年8月16日から21日までマレーシアのクアラルンプ

ール（Kuala Lumpur）において第31回国際大会(31st International Conference)を開催した。この大会開始前 2 日間（8 月 14 日および 15 日）を利用し、ICSW は、世界代議員会(Committee of Representatives Meeting — CoRep Meeting)と地域代議員会（Regional CoRep Meeting）を開催したのであった。これらの代議員会に、ICSW 日本国委員会は、同委員会の常務理事松寿庶（全国社会福祉協議会・常務理事）および同委員会代議員の多々良紀夫（淑徳大学社会学部教授）の 2 名を派遣した。本稿は、上記の世界代議員会と地域代議員会に関する報告書である。筆者は、2000 年 10 月に南アフリカのケープタウンで開催された ICSW 世界および地域代議員会、さらに、2002 年 6 月 23・24 日にオランダのドルドレヒトで開かれた ICSW 世界・地域代議員会にも日本の代議員として出席した。

2.1 回目の世界代議員会（2004 年 8 月 14 日）の概要

世界代議員会は、8 月 14 日午前 11 時から午後 3 時（第 1 回）までと、8 月 15 日午前 10 時から午後 1 時（第 2 回）までの 2 回、クアラルンプール市のジャラン・プトラ地区（Jalan Putra)にあるパン・パシフィックホテル（Pan－Pacific Hotel）の特別会議場で開かれた。後で、ICSW 事務局の職員から聞いてわかったことだが、この世界代議員会には、32 カ国から合計 48 人が参加していた。さらに、今回世界代議員会が、地域代議員会を間に挟んで 2 回にわたって開催されるのには、重要な訳があることも議事の進行につれてわかった。このことについては後で述べる。ICSW 日本国委員会代表の 2 人の代議員と現地で手配されていた日本人通訳は、「ロの字型」に設計されていた会議場の正面後方に着席した。後部には、スペイン語とフランス語の同時通訳のブースが配置されていた。議事はいつものように英語で進行された。

世界代議員会の議長は、ICSW の新世界会長ソルヴェイ・アスケム女史（Ms. Solveig Askjem）が勤めた。著名なノルウエーのソーシャル・ワーカーである同女史は、当時世界会長であったカジ・ファルク・アーメッド博士（Dr. Qazi Faruque Ahmed, バングラデシュ)が会長を辞任した直後、ICSW 世界執行委員会（ICSW Executive Committee－ExCo）から、2003 年 9 月 26 日付けで、アーメッド元会長の残りの任期を勤めるよう任命されたのであった。本世界代議



会議会場

員会終了と同時に、その任期が終わるので、会議中に会長（やその他の役員）の選挙が予定されていた。ICSW 日本国委員会は、同女史を世界会長の候補として推選していたのであった。このたび、世界会長として初めて世界代議員会の議長を務めることになったアスケム女史は、会議の冒頭に簡単に彼女がICSW世界会長になった経緯を説明した。同女史は、長い間、ICSW ヨーロッパ地域の役員として活躍していたり、最近は、ICSW ヨーロッパ地域の会長を務めていたりしたことなどから、ICSW の事情には精通していた。会議中に、アーメッド元世界会長の近況が話題になった。ICSW 常務理事のデニス・コレル氏（Mr. Denys Correll）の報告によると、本職の NGO の仕事が忙しくてICSW世界会長を辞任したアーメッド博士は、その後、バングラデシュ国内で何らかのトラブルに巻き込まれて、2004年5月に警察に逮捕されて、裁判にかけられることもなく長期にわたって拘留されているということであった。ICSW を代表して、コレル氏はバングラデシュ政府にアーメッド博士の即時釈放をアピールしたということも報告された。その後の筆者の調査によると、コレル氏が世界代議員会で報告したとおりのことが発生した事が確認された。そして、アーメッド博士の逮捕は、バングラデシュはもとより、アジア地域の人権擁護団体の間でも、大きな心配事になっている事も判明した。というのは、逮捕後、アーメッド博士等とのコミュニケーションは絶えていて、「拷問」にかけられている疑いもあるという報道もあったからである。

今回の世界代議員会の目的

本世界代議員会の重要議題は 3 つあった。1 つは、2005 年度と 2006 年度のICSW世界プログラムの採択、2つ目は、2005 年から 2006 年までの 2 年間のICSW世界予算の採択、そして3つ目は、ICSW 世界会長を含む、世界のICSW役員の選挙であった。この 3 項目は、2 年ごとに開催されるICSW世界代議員会の議題にいつも含まれていた。世界会長の選挙は 4 年に 1 度であるが、その他の世界役員の欠員のための選挙はよくあることである。しかし、重要なことは、ICSWの設立規約（Constitution Clause 10.d）によれば、世界役員は、2 年に 1 度、2 年度分の世界予算の枠組（Global Budget Framework）の承認を世界代議員会から得なければならないと定めている事である。普通、予算はプログラムまたは活動計画に対して組まれるものなので、当然、世界代議員会は、世界プログラムも検討して承認することになっている。そして、今回の世界代議員会もそれを行うことになっていた。

ICSW2005 年度及び 2006 年度世界プログラムの紹介

世界プログラムと世界予算の承認は、

今回の会議の議題が合計 12 項目ある中で、「第 9 項目」になっていたので、8 月 15 日の代議員会で行われることになるかもしれなかった。8 月 14 日の会議においては、2005 年度と 2006 年度の ICSW の世界プログラムの紹介が、「報告事項」として議題に入っていた。そして、その「紹介」を担当するのは、イギリスとフィンランドにキャンパスを持つシェフールド大学（University of Sheffiled）の社会政策の専門家ボブ・ビーコン教授（Professor Bob Beacon）であった。議長やビーコン教授から詳しい説明はなかったが、配付された資料によると、2004 年の 4 月に ICSW とシェフールド大学は、ヨーロッパの社会政策の研究者達をヘルシンキへ招いて「ヘルシンキ・プロセス」という「専門家会議」（An expert meeting）を開催したのであった。この会議の目的は、グローバルおよび地域レベルの視点で、社会保障、社会開発、社会的・経済的な安定、貧困問題の解消、人間の安全、社会資源や社会サービスへのアクセス等の問題を検討して、政府機関と非政府領域の組織が協力してどのような活動を数々の問題解決のために展開する事ができるかを考えることであった。ICSW の 2005 年度と 2006 年度の活動プログラムは、この「ヘルシンキ・プロセス」を基に作成されたものであった。

議長のアスケム女史の簡単な紹介の後、パワーポイントで準備された資料を使って、ビーコン教授は、来年度からの ICSW 世界プログラムを発表した。シェフールド大学のヘルシンキ・キャンパスに勤務しているかもしれないが、彼がイギリス人であることは彼のアクセントから明確であった。ビーコン教授は、ICSW は世界レベルでも地域レベルでも国連と強い協力関係を結んで活動を展開していくべきであると説いた。さらに、ICSW の新しいアプローチは、「北と南がパートナーとして活動を展開すると同時に、北は以前より活動的になる」さらに、「南は、南の中において政策面で対話を強化する」環境の中で、北においては EU 諸国と連携を強化して、南においては、国連の社会開発機構と協力して活動を進めていくべきであると説明した。ビーコン教授の講演後、アスケム議長は、ICSW 世界プログラムの討論と採択の決議は後に行うと述べて、次の議題である「ICSW 会長を含む役員の報告」へと進行した。

ICSW 会長および常務理事の報告

ICSW 会長と常務理事の活動報告は、かなり長いものであったが、その概要は以下のとおりである―2003 年以来の ICSW 事務局の活動は、2001 年に始まった「世界プロジェクトの地球化」（Globalizing World Project）における「地域における協力」（Regional Cooperation）に力を入れた。このプログラムの目的は、国レベルや地域レベルの「市民社会団体」（Civil Society

Organizations）の能力を強化することであった。従って、プロジェクトの主要な活動は、地域レベルで集会を開いて、市民社会団体がそれぞれの国の政策討論に参加できるような能力がつくように育てることであった。ICSW の活動は、様々な地域でいい結果をもたらした。例えば、2003 年 1 月 11－13 日に、ICSW は南アジア国際パートナーシップ協会（SAPI）と共催で、パキスタンのイスラマバード（Islamabad）において「南アジア人民サミット」を開催した。この会議は、数百人の南アジアの市民社会団体の代表者を集合させることを可能にして、彼等に自分達の関心事について意見を述べる「場」を提供した。さらに、この会議は、参加者に地域レベルでの協力の強化の重要性を認識させる機会にもなった。ICSW は、アフリカにおいても同様な目的の複数の会議を開いた。

例えば、2003 年 8 月 16－17 日に、タンザニアのダー・エ・サラーム（Dar es Salaam）で、ICSW が南部アフリカコミュニティー開発協議会（Southern African Development Community Council for NGOs (SADC CNGO)とパートナーを組んで、南部アフリカ地区市民社会会議を開催したのが、その一例である。この会議の特徴は、南部アフリカ地区の国々の元首のサミットの直後に開催されたもので、出席率も良く、同地区から 40 人を超える NGO の代議員が参加したことであった。さらに、ICSW は、西部アフリカ地区においても、2003 年 11 月 29－30 日にナイジェリアのアブジヤ（Abuja）で、西部アフリカ地区市民社会会議（Western Africa Civil Society Forum）を西アフリカ開発のための全アフリカ協会（Pan African Institute for Development West Africa）と共催という形で開いた。この会議は、西部アフリカ地区の元英国領の国々の元首の会議に先がけて行われたもので、コモンウエルズ財団（Commonwealth Foundation）が資金援助をした。

ICSW 常務理事コレル氏の報告は、ICSW が様々な、ICSW の地域でおこなった活動の成果報告を含む詳細なものであった。また、コレル氏は ICSW が国連の「諮問機関の役割」(Consultative Status) を立派に果たしていることを強調した。事実、ICSW は、最近、国連女性の地位に関する委員会（UN Commission on the Status of Women—CSW)、ユニセフ（UNICEF)、ユネスコ（UNESCO)、世界保健機構（WHO)、国際労働機構（ILO）などと連携を深めているようである。そして、国連との関係を一層強化すべく、ICSW 世界執行委員会（ExCo）の会議は、いつもニューヨークで開催することになっていた。去年 2 月の会議も例外ではなかった。最後に、コレル氏は、ケート・キャッキー女史(Ms. Kate Katzki）が、最近亡くなったことを報告した。彼女は、ICSW に 40 年以上も関わっていた著名なソーシャル・ワーカ

ーで、昔、ICSWの事務局長（Secretary General）として務めたこともあった。コレル氏によれば、キャッキー女史は、彼女の遺言で、ICSWに3万ドルを残したとのことであった。

ICSW世界財務担当役員の重大な提案

世界執行委員たちがなぜ世界代議員会を、地域代議員会をはさんで2回開催する計画を立てたのか理解できる時がきた。ICSW 世界財務担当役員マイケル・レイパー氏（Mr. Michael Raper）の役割は、2005年度と2006年度のICSW世界予算を提案して、世界代議員会の承認をうることであった。しかし、レイパー氏にとって、これはとても難しい仕事であった。なぜならば、ICSW の財務状況は悪化していて、2005年度も2006年度も「赤字予算」が予想されているからであった。この事実は、レイパー氏が、配付した資料から会議に出席していた世界代議員全員が知ることになった。レイパー氏によればそれらの赤字予算を避ける方法は、「基本的な収入」(core income) を増やすか、「基本的な支出」（core expenses）を減らすしかないが、この時点では、ICSW 会員の会費（membership fee）から得られる基本的な収入額を上げることも基本的な支出額を下げることも不可能だということであった。来年度以降の支出に関しては、「本世界代議員会終了後、コレル氏を除く全ての職員を解雇して、本部事務員の費用を最低限に抑える」とレイパー氏は述べた。では、どのようにしてこの「危機」を乗り越える事ができるのか？レイパー世界財務担当役員の提案は、以下の通りであった—ICSW の規約によると、カテゴリーA会員を含む全てのICSW会員は、ICSW 本部に会費を納めることになっている。しかし、カテゴリーA 会員の会費の2分の1は、地域の活動を支えるために、毎年各地域の事務局に、本部からは払い戻されることになっている。そこで、世界執行委員の提案は、「2005年度の1年に限って、各地域の国々は、この還元金に対する権利を放棄して、本部へ寄付したことにしていただきたい」ということであった。

さらにレイパー氏は、「この提案を本日の地域代議員会で検討し、明日の世界代議員会で結果を報告していただきたい」と付け加えたのであった。

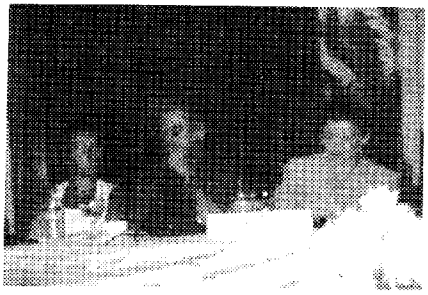
財務担当役員の提案に対する反応

このレイパー氏の提案に対する世界代議員たちの反応は、様々であった。ICSWの財務的な危機に同情的な発言が多かったが、レイパー氏が提案したやり方で問題が解決されると考えている代議員はいないようであった。しかし、具体的な解決策を提案する代議員もいなかった。ICSW 日本国委員会の立場は、レイパー氏の提案に「反対」であった。同委員会としては、ICSW の本部事務局の財務危機を、地域事務局が地域の活動資金として期待しているICSW本部からの還元金を

放棄させて解決しようとする考え方には賛成できない、という立場を主張することに決めた。「ICSW 本部の財政的救済計画は、地域への還元金の問題とは別に討論されるべきで、ICSW 日本国委員会としては、いつでも話し合う用意ができている」という意向を発表することも決定した。そして、日本国の代議員は、発言を求めてこれらの考え方を世界代議員に明確に示した。あとで分かったことだが、オランダとドイツの代議員も基本的に日本の意見に賛成であるということであった。

3.1回目および2回目の北東アジア地域代議員会（2004年8月14日）の概要

北東アジア地域代議員会は、8月14日午前9時から11時（第1回）まで、同日の午後3時~4時30分（2回）まで、そして、8月15日午後5時から6時30分（第3回）までの合計3回行われた。会場は、世界代議員会が開かれた会議場の近くの小会議場であった。3回にもわたって地域代議員会が開催された理由は、通常の会議以外に、世界執行役員の「提案」を審議するためと、地域の役員選挙を行うために2度の会議が必要だったから



地域代議員会の様子

であった。8月14日の1回目の会議では、北東アジア地域役員3人と、同地域の会員国の香港、台湾、韓国および日本の代議員7－8人、さらに、オブザーバーとして香港から2人、台湾から2人（合計14－15人）が出席していた。

会議の議長は、北東アジア地域会長のショーポー・チャオ博士（Dr. Chou-Po Chao）が務めた。出席者が簡単な自己紹介を終えた後、チャオ会長の活動報告および北東アジア地域財務担当理事のリヴィア・ユー女史（Ms. Livia Yu）による財務報告と続いた。さらに、香港の代議員からの活動報告があった。この時点で、議題全ての検討を終えて、定例地域代議員会は、世界代議員会のために閉会した。

8月14日午後3時から始まった2回目の北東アジア地域代議員会は、同じ日の午前中に行われた世界代議員会で提案された ICSW 本部事務局から地域への「還元金」(reimbursement money)の一時中止について検討する事が目的であった。議長のチャオ博士は、「北東アジア地域としては、この本部の提案にどのような返答をするべきか」決定しなければならないと会議の目的を述べた。財務担当理事であるユー女史は、「具体的に言うならば、本地域にとって、本部の提案は、来年度、約13,000ドルの期待していた収入が入ってこないということである」と説明した。さらに、「しかし、本地域の財政状況は良好なので、この収入減は致命的な打

撃とはならないであろう」と付け加えた。ここで、日本国の代議員は、チャオ議長の許可を得て、「この提案の核心は金額ではなく、ICSW 本部役員や職員の方針や組織の運営が間違っていたということである。今回の提案に関しても、一時しのぎのやり方に過ぎなく、ICSW 本部には根本的な問題解決の策があるとは思えない。しかし、日本国委員会としては、ICSW の財政的破綻は避けたいと思うので、北東アジア地域の選択肢としてある提言をしたい」という意味の発言をした。さらに、「北東アジア地域としては、還元金の13,000 ドルは本部から求めるべきである。しかし、われわれは本部の財政赤字の救済の目的で 10,000 ドルを本部へ直ちに送金する準備をするべきである。そのために、日本国委員会は 10,000 ドルを北東アジア地域に送金するので、他の国々は相応の金額を分担してカバーするようにお願いしたい」と言って発言を終えた。ICSW 日本国委員会の提案には、出席者全員が「賛意」を表明したので、チャオ議長は、日本国委員会に感謝の意を示す発言の後、2 回目の北東アジア地域代議員会を閉じた。

4.2 回目の世界代議員会（2004 年 8 月 15 日）の概要

世界財務担当役員の提案に対する各地域の反応

2 回目の世界代議員会は、2004 年 8 月 15 日の午前 10 時から午後 1 時まで開かれた。その目的は２つあった。1 つは、前日の世界財務担当役員レイパー氏の提案について地域代議員会の決議を討論すること、2 つ目は、ICSW 世界会長を含む世界執行委員の選挙を行うことであった。アスケム女史の議事進行で始められたこの会議は、各地域の会長が「2005 年度の ICSW 本部からの地域への還元金の停止（suspension）についての地域代議員会の決定」を発表した。北東アジア地域を代表してチャオ同地域会長が「レイパー氏の提案には賛同できない。われわれの地域への還元金は規定通り支払って戴きたい。しかし、われわれは、ICSW 本部の財政的な危機の救済のために 10,000 ドルを直ちに送金する計画である」と前日の地域代議員会の決議を報告した。他の地域の会長は、全員レイパー氏の提案に「賛成」の意を表明したが、様々な条件をつけた。たとえば、ヨーロッパ地域の会長は、「本部の事務職員の費用などは、最低限に抑えるべきで、また、2005 年以後の財政活性化の計画を直ちに検討するべきである」と厳しく言及した。結局、賛成多数で、レイパー氏の提案は採決されて、2005 年度の本部から地域への還元金は停止されることになったのだが、北東アジア地域代議員会の決定は認められたようで、同地域からは、10,000 ドルを ICSW 本部へ送金することになった。会議直後、心配顔のレイパー氏は、ICSW 日本国委員会の代表者のところへ来て、なぜ彼の提案に反対なのか尋ねた。日本国の代議員は、「北東アジア地域代議員会の決議は、レイパー氏の考え方を含

む他のどの考え方より優れている。他の地域代議員会も、われわれと同じような決議をして欲しかった」と説明した。われわれの説明の要旨は、「第1に、本部からの還元金を地域の活動資金の一部として期待している地域にとって、還元金の支払い停止は迷惑なことである。第2に、レイパー氏の提案では、本部に資金が集まるのは、ICSW会員国が 2005 年度の会費の納入を完了した時点である。恐らく、それは 2005 年の終わり頃であろう。われわれの提案は、本部の救済を会費の納入と切り離して考えるので、資金は直ぐ集めることができる。従って、われわれの考え方はベストである」というものであった。レイパー氏は、われわれの説明を充分理解したようであった。この後、ICSW 世界と地域の役員の選挙を行うことになって判明したことだが、レイパー氏の世界財務担当役員の任期は、本大会で終わることになっていて、彼は南東アジア及び太平洋地域の会長候補者として指名されていた。

ICSW 世界執行委員の選挙の様子

ICSW 世界執行委員の候補者の指名（nomination）は、2004 年 6 月 4 日で締め切られていた。配付されたリストによると、すべてのポジションに対して 1 名の候補者しか指名されていなかった。ということは、「選挙」(election)の必要はなくて、候補者の「承認」(approval)だけで全ての役員が決定されることになっていた。さらに、ICSW の規定によると、新会長を含む新役員は、2004 年 8 月 20 日から役員の仕事を開始すると決められていた。役員候補者の承認は、何の問題もなく進行して、30 分位で全ての新世界執行委員が承認された。ICSW 世界会長は、ノルウェーのソルヴェイ・アスケム女史が、続けることに決まった。しかし、世界財務担当役員には、フランスのクリスチャン・ローレ氏（Mr. Christian Rollet）が新しく承認された。さらに、カテゴリーB 会員（国際的組織）から Plan 団体のマーティン・マキャン氏(Mr. Martin McCann）と救世軍(The Salvation Army)のドーン・セウェル女史(Ms. Dawn Sewell)が世界執行委員として選ばれた。加えて、香港のチューワ・ホイ・ウェイ氏(Mr. Chua Hoi Wai)が世界執行委員に北東アジア地域代議会から選ばれたことになっていたが、この件については、筆者等には事情の説明がなかったので、事態がのみこめなかった。

5.3 回目の北東アジア地域代議員会（2004 年 8 月 15 日）の概要

3 回目の北東アジア地域代議員会は、2004 年 8 月 15 日の午後 5 時 30 分から 6 時 30 分まで行われた。この会議の主な目的は、地域の会長を含む新しい地域の役員の選挙を行うことであった。同地域の現会長のチャオ博士の任期は、今回のマレーシアの地域代議員会閉会と同時に終了することになっていた。新会長と共に選出されなければならない地域役員は、地域財務担当役員であった。これらの役職の候補者の指

名の締め切りは2004年8月12日となっていたが、3 回目の地域代議員会が開始された時点で候補者は誰もいなかった。実は、ICSW 日本国委員会としては、次の北東アジア地域会長は韓国から候補者が出るべきだと考えていて、チャオ現地域会長の了解のもと、韓国内の関係者との調整を進めていた。日本、香港、台湾の三国は、「世界の副会長」か「地域の会長」を経験したが、韓国は「世界執行委員」の経験はあるが、「地域の会長」も「世界の副会長」も未経験であった。3 回目の北東アジア地域代議員会の開始時刻が 30 分程遅れたのは、韓国の関係者の中で地域会長候補が決まらなかったからであった。チャオ現地域会長とキム・デゥク・リン(Mr. Kim Deuk Lin)韓国社会福祉協議会会長を交えた関係者の話し合いの結果、韓国の現 ICSW 世界執行委員であるジョン・サム・パーク博士(Dr. Jong Sam Park)が次期北東アジア地域会長の候補として決定した。

会議の開始が遅れたことの謝罪の後、チャオ議長は、ジョン・サム・パーク博士を次の地域会長の候補として紹介した。同席していたキム韓国社会福祉協議会会長へ謝意を表明したチャオ議長は、キム会長の支援と協力があって、パーク博士の地域会長候補が決まったことを述べた。続いて、チャオ議長は、台湾のベティ・ウェング博士(Dr. Betty Y. Weng)を次期北東アジア地域財務担当理事の候補として紹介した。両候補者は、北東アジア地域会員国の代議員会によく出席しているので、同地域の代議員達にはよく知られていた。チャオ議長は、「選挙が行われる 2 つの地域役員のポジションにはそれぞれ 1 人の候補者しかいないので、投票でなく、代議員の承認という形で役員選挙を行いたいが賛成していただけるか」と出席者に尋ねた。全員の「賛意」を確認した後、チャオ議長は各候補者について、全代議員の承認をとって地域役員の選挙を終えた。大きな拍手の中、パーク新地域会長とウェング新地域財務担当理事は、それぞれ短い新任の挨拶を行い、代議員のサポートを感謝して、全力で頑張ると約束した。さらに、香港のチューワ新世界執行委員も、チャオ議長に紹介されて抱負を語った。最後にチャオ議長は、「この4年間とても楽しく仕事が出来たのは、北東アジア地域会員国関係者全員の支援と協力があったからであるので、厚く感謝したい」と述べて、彼の最後の地域代議員会を閉じた。この会議の後、チャオ博士は、北東アジア地域会員国の ICSW 関係者を招いて夕食会を開いた。会場のパン・パシフィックホテルの中国料理店には各国の社会福祉関係者が集まった。席上、チャオ博士は、「この 4 年間、長尾 ICSW 日本国委員会理事長・全国社会福祉協議会会長には格別のお世話になった」と述べて長尾立子会長に深い感謝の意を示した。

まとめ

2004 年 8 月にマレーシアのクアラルンプールで開かれた ICSW 世界代議員会は、ICSW の財政的危機を浮きぼりにした会議であった。この危機を、本部から地域の活動資金として使う「還元金の停止」という方法で乗り切ることに決めたのだが、これはあくまで「応急処置」で問題の根本的解決になっていない。ICSW 世界会長をはじめ世界執行委員は、ICSW が重大な「存続の危機」にあることを認識していることであろうが、マレーシアの会議においては、そのことは討論されなかった。2005 年度 1 年限り、還元金の支払いを停止すると決定したのだが、それ以降の ICSW の財政的状況が向上しないと、地域への還元金の停止が長期化するか、廃止になる可能性が十分ある。ということは、活動を休止しなければならなくなり弱体化する地域が出現するに違いない。今回世界代議員会の様子を見る限り、ICSW 世界役員や本部職員への「信頼感」とか「期待感」は、決して高くなかった。従って、地域の活動を犠牲にして、ICSW 本部の救済を優先させる会員国が多数あるとは思えない。世界役員と本部職員は、「ICSW の財務面の強化には直ちに取り組むので、還元金の支払い停止は 2005 年度 1 年のみで十分である」と約束したので、見守るしかない。しかし、ICSW にとって、これが最後の立て直しのチャンスになるかも知れないということを彼等は認識しているのであろうか。

第31回　ICSW国際社会福祉会議(マレーシア)　会議日程

テーマ：『社会発展と社会正義』
-Social Progress and Social Justice-

日付 / 時間	8月15日 (日)	1日目 8月16日 (月)	2日目 8月17日 (火)	3日目 8月18日 (水)	4日目 8月19日 (木)	5日目 8月20日 (金)
09:00-10:30	登録 (10:00- 22：00)	登録 (09:00-14:30)	全体会議2	全体会議3	分科会E	視察訪問 (09:00- 17:00)
11:00-12:30		開会式 (10:00-12:00)	シンポジウム Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ	分科会C	シンポジウム Ⅶ,Ⅷ,Ⅸ	
12:30-13:30		昼食				
13:30-15:00		全体会議1	分科会A	シンポジウム Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ	円卓会議 ポスター・セッションⅡ	
15:30-17:00		ポスター・セッションⅠ	分科会B	分科会D	閉会式	
夕方		レセプション (18:00-20:00)	会議ディナー (20:00-23:00)		送別ディナー (20:00-23:00)	

■全体会議の主なテーマ
グローバル化の社会的因果関係／宗教、文化と社会的一体性／市民社会と地域協力

■シンポジウムの主なテーマ
グローバル化する世界における社会保障／極貧状況の撲滅／
国連改革と市民社会の介入力向上／出生届の世界共通化／ジェンダー批判／
グローバル化する世界における移民労働者／高齢化対策／開発資金／
2005～2006年のICSWのあり方

■分科会の主なテーマ
社会保障／社会開発／社会福祉政策および社会福祉を支えるシステム
(子供、高齢者、障害者、移民労働者、性転換者など)